

2003年度キリスト教学科始業礼拝説教 良い羊飼い
ヨハネによる福音書10章11～16節

著者	佐藤 司郎
雑誌名	東北学院大学論集．教会と神学
号	37
ページ	1-9
発行年	2003-11-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024578/

2003 年度キリスト教学科始業礼拝説教

良い羊飼いい

—— ヨハネによる福音書 10 章 11～16 節 ——

佐 藤 司 郎

今年度の始業礼拝のため示された聖書箇所は「ヨハネによる福音書」第 10 章 11～16 節です。羊飼いいという呼び名がくり返し出てきます。羊飼いい、しかも「良い羊飼いい」が主題であることは明らかです。

羊飼いいというのは、聖書の文化圏では、特別な人たちではありませんでした。私たちにも、聖書を知っている人には、親しい名称であるに違いありません。これは一つの職業を表わすとともに、象徴的・比喩的にも使われました。民衆にそれだけ身近な存在だったということです。強調されなければならないのは、それがとくに神を表わすのに、あるいは王を表わすのに使われたことです。今日の聖書箇所では、「救い主」を表わすのに用いられています。もっとはっきり言えば、イエス・キリストを表わすのに用いられています。聖書は、この呼び名で、イエス・キリストを、その人格、その働き、そして私たちとの関係を語ろうとしているのです。

1

スイスの優れた牧師であり説教者であったヴァルター・リュティは、

1942年にベルンの自分の牧する教会で行なった「良い牧者——羊飼いの譬」という題の説教を、このように語り始めています。「私もそんなのですが、おそらく皆さんもきっと、今や私たちは、このよく知られた良い羊飼いの言葉が、ある特別の響きをもち始めた時代に生きているという印象を禁じ得ないことでしょう。狼は解き放たれ、今や徘徊している。その吠える声は、われわれの夜の眠りをさまたげ、一日中、われわれにやすらぎを与えることをしないのです。今やまことに狼の時代です」(W. Lüthi, Johannes, 1942)。「今やまことに狼の時代です」とリュティは言っています。この聖書箇所を読んで、「狼」という言葉に、当時のリュティと同じような「特別の響き」を感じとる人は、今日それほど多くないでしょう。

1942年に「狼」とは、まさにヒトラーの戦争のことにほかならなかったのです。狼は「羊を奪い、また追い散らす」。スイスの人びとも(中立国の彼らは第二次世界大戦の直接の当事者ではなかったが)、その只中であって、まさに狼の吠える声におびえる羊たちと同じく、恐れと不安の中に置かれていました。

今日も、羊たちを、すなわち、教会だけでなく、すべての人を不安の中に置くものは少なくありません。「羊を奪い、また散らす」狼が、すなわち、羊をその本当の持ち主から奪い取って離れさせてしまう闇の力が働いていることは誰も否定できません。なるほど、ヒトラーの戦争のような、はっきり牙をむきだしわれわれに襲いかかろうとしている勢力はないかも知れません。しかしこの世には、私たちを神から引き離そう、私たちの信仰に水をさそうという力はあるのです。キリスト教、教会、いや私たち自身をとりまく環境は決してなま易しいも

のではありません。若い人々には、面白いことや楽しいことが一杯あります。友人たちも何かと適当にやっているように見えます。自分のことをしっかり考える、人がなんと言っても自分は教会に行く、勉強する、良心的に生きていくという気持ちが揺らいでいきます。弱くなつてきます。あるいはアルバイトばかりで、本来の自分のやるべきことを結局見失ってしまうということもあります。今日の時代精神、われわれをとりまく精神的状況は、多くの問題をはらんでいます。神の愛と期待の中で自分の人生の意味と課題を見いだすことができないまま闇の力に翻弄されている若者の多いこの国の現実を思わないわけにはいきません。その意味で、私たちの時代も、まことに「狼の時代」ではないでしょうか。

2

こうした狼の時代、はっきり牙をむいてくる狼だけでなく、目に見えにくい、しかし私たちの魂を、私たちの命をおびやかす力の働いているこの時代、どのような在り方が私たちに求められているのでしょうか。

今日の聖書の言葉に返ってみましょう。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、自分の羊をもたない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また散らす。——彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである」(11～13節)。

少なくともここで問題なのは、私たち自身が狼に対抗し、狼と闘い、

これに勝利することではありません。そういうことは求められていません。そうではなくて、私たちは羊として、いわば偽の羊飼いでなく、私たちが命がけで守る本当の羊飼いに従うことです。

ここでイエス・キリストは、良い羊飼いと、そうでない羊飼いがいると言っています。こういう言い方は、旧約聖書にもとづく言い方です。たとえば、エゼキエル書では、その当時のイスラエルの指導者たちを指して、自分を養って民を養わない羊飼いを、偽の羊飼いだと言って痛烈に非難しています（34章）。

「良い羊飼」と、そうでない者、ここで「自分の羊をもたない雇い人」と呼ばれている者との違いはどこにあるのでしょうか。イエス・キリストの言葉によれば、それは、端的に、良い羊飼にとって羊の群は彼のものであるけれども、雇い人にとって羊は彼の所有ではないということです。雇い人は羊に責任を感じない。羊が危険にさらされても、そのために命がけになることがない、むしろ自分の身の安全のために、いつでも羊を「置き去りにして逃げ」ていくと言われます。そして、まさに狼の時代において重要なことは、このような偽の羊飼いを見抜き、彼ではなく、私たちがその方の所有である本当の羊飼いに従い、そのもとに留まることなのです。

3

ところで、私も含めて、おそらく皆さんも、羊という動物について、まして羊飼という職業について経験的な知識を全くもちあわせていないことでしょう。それを知るために、差し当たり、私たちは、聖書

のいくつかの箇所から推察してみる以外ないのです。有名な詩編 23 編はどうでしょうか。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない、主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」と、詩人は、主なる神をわが羊飼いと呼んで歌っています。私たちが「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」からと言っています。たしかに私たちの生活は楽しいことばかりではない、悩みも心配もないというのではない。むしろ反対です。耐え難い苦しみがあります。嫌なことがあります。不安があります。詩編の詩人もそうした人の苦しみと悩みを知っています。でも、その時でも、その只中にある時でも、主が羊飼いのように共にいてくださると告白します。そして「命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う」のです。旧約の詩人にとって、これが、私たちが良き羊飼いである神に従う時の恵みと力でした。

新約に目を転じれば、クリスマスの時、救主の誕生を、その喜びを、誰よりも先を聞くことを許された羊飼いのことを私たちは思い起こします。彼らは寝ずの番をし、羊の群を危険から守っていたのです。あれはたしかに羊飼いの姿です。

もう一つ、忘れてならないのは、有名なルカによる福音書 15 章の、迷い出た一匹の小羊を探し出す羊飼いではないでしょうか。当時の羊の群の数え方は、例えば石の囲いの入り口に羊飼いが杖をかざして、その下をくぐらせ、一匹一匹を確認していたようです。数えるというよりも、その特徴でしっかり覚えているというような記憶の仕方であったのです。杖の下をくぐらせながら、あの羊がいないとずっと考えて

いた、果たして99匹だったということです。この羊飼いは、これらの99匹を野原に残したまま、それらを危険にさらしても、見失われた一匹をさがしに行きます。まるで99匹全部をたばにしたよりこの一匹が大切だというように。良き羊飼いは命がけで、他の羊の命を危険にさらしても、迷い出た羊を探し出します。良き羊飼いと羊の関係はそのようなものでした。

4

もう一度、今日の聖書に目をとめてみましょう。良き羊飼いについてこう言われています。「わたしは良い羊飼いです。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。また、わたしのものは、わたしを知っています。……わたしは羊のために命を捨てる」(14～15節)。

ここでいう「知っている」というのは、たんに認識している、見知っているというわけではありません。もっと根源的な関係を意味しています。この関係を言葉で表現することは、なかなか難しい。後のパウロの言葉で言えば、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ2・20)とでも言うべきでしょうか。あるいは、もう一度詩編の言葉を借りれば、「主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる。座るのも立つのも知り、遠くからわたしの計らいを悟っておられる。歩くのも伏すのも見分け、わたしの道にことごとく通じておられる。わたしの舌がまだひと言も語らぬ先に、主よ、あなたはすべてを知っておられる」

(139 篇)，というような関係です。

良い羊飼いである主イエス・キリストは、私たちをそのあるがままの生活において知っておられるのです。知られていないものは何もない。もはや何も隠し立てすることはないし、その必要もない。それゆえに、そのまま私たちは生きることができるのです。知られていることは、むしろある意味では、たいへん恐ろしいことです。しかし同時に知られていることは、私たちを自由にします。根源的に解放します。隠さなくていいのだから。神に知られていることを知って私たちは歩むのです。

さて大切なことは、良き羊飼いとはイエス・キリストであるということです。この方が「わたしは羊のためにわたしの命を捨てる」と語っていることを見過ごしにはなりません。それを見過ごすなら、良い羊飼いはイエス・キリストでなくてもよいことになります。私たちを知り、私たちにご自分を知らしめ、私たちを愛し、その愛を極みまで遂行された方、十字架においてご自身を私たちのために捧げた方、この方が私たちの良い羊飼いです。まさに「狼の時代」に、このイエス・キリストというただ一人の羊飼いに従うことが大切です。そしてその時にこそ、私たちの人生の意味と課題が神によって明らかに示されます。この羊飼いにつねにお従いすること、誰か人間ではなく、自分でもなく、ただ主イエス・キリストに従って歩むことが大切です。

最後に、16 節の聖句を読み落とさないようにしましょう。イエス・キリストは、「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる」と語っています。これは今日、私たちに、きわめて大切なことを語っ

ています。第1に、私たちはイエス・キリストを教会の壁の中に閉じ込めてはならないということです。じっさいそのようなことはできない。私たちは、この世の主であるイエス・キリストを、教会の主としていただいているからです。主イエス・キリストのお働きは教会の壁を越えて広がっています。第2に、この聖句の示すことは、私たちにとって希望であり、励ましです。それは私たちに伝道の使命を確信させるものです。日本のキリスト教は依然として少数者です。小さな群です。しかしこの群が、やがて一人の羊飼いのもとに一つの神の民となる多くの人びとに先んじて、神を賛美する特別の使命と栄誉と恵みを受けた者たちだと考えれば、たとえ私たちがどんなに小さくとも、希望をもって歩むことができるのです。「こうして羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」。「なる」です。将来の確かな約束です。それは終末的な希望です。希望とは、ここに無いものによって生かされ、そして生きることです。この希望によって、教会も私たちも歩みます。教会はいつも途上にある、聖霊による希望の共同体です。キリスト教学科で学びはじめた皆さんも、将来、どのような形においてであれ、イエス・キリストの大いなる働きに仕える人として成長することを祈ります。

今日は、はじめに、リュティの説教の語りだしの言葉を紹介しました。最後に、その続きをさらに引いて、私自身の説教の結びともしたいと思います。「今やまことに狼の時代です。しかし、あそこで語っておられる方は、すべての時代のために語られたのだ。狼の時代にも、キリストの言葉は妥当します。すなわち、わたしは良い羊飼いである」。良い羊飼いであるイエス・キリストにこの新しい年度も共に従ってま

いりましょう。

(2003年4月14日 ラーハウザー記念礼拝堂)